様々な手立てで、登校習慣の確立を

不登校生徒の状況

対象生徒は、環境の変化に対応することが苦手で、小学校５年生のクラス替え後も新しいクラスになじめず体調不良を訴えることがあったが、小学校卒業に向けて改善傾向にあった。中学校に入学し、新しい環境で頑張ろうとしたが、友達と話が合わず、体調不良にもなり、入学当初から欠席が続いている。

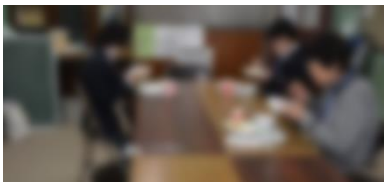
具体的な取組

○別室における学習支援

週２日、登校サポーターによる別室での学習指導を行っている。数学や英語など教科の学習を中心として、教科書やワークシートを使って個別に学習を行っている。また、美術や書写にも取り組んでいる。別室での対応だけでなく、学校行事や学年行事に登校サポーターと共に、参加や見学をしている。

○登校サポーターの活用

登校サポーターと別室利用の生徒が一緒に給食を食べる。対ではなく別室利用をしている他学年の生徒などとも交流しながら楽しい時間を過ごしている。



○活動内容の自己決定

一週間の予定を本人と相談して決め、登校サポーター対応の別室を２日間、外部の学習支援教室を２日間、ＳＣとの面談を１回利用している。登校サポーター、ＳＣ、関係機関と担任、学年が連携し、生徒の進路を見据えた目標や活動予定を定期的に設定している。

○一人１台端末の活用

学習支援の際にはタブレット端末を使用し、ＡＩドリルを活用している。教科の学習だけではなく、総合的な学習の時間としての校外学習やSDGｓの調べ学習にも活用している。

成果

当該生徒は、学校への登校日数が増えた。また、外部機関と連携することで、平日は毎日決まった時間に家の外に出たり、学習したりする習慣が身に付いた。集団の活動にも少しずつではあるが参加することができている。

課題

当該生徒は、短時間の学習時間、内容となっていて、学力の定着が課題である。

校内別室支援について

不登校児童の状況

対象児童は、生活リズムの乱れ、学習の困難感があり不登校となっている。

小学校３年生のときに転入し、前校でも不登校であった。現在は、月に３日ほど保健室へ登校後、別室で過ごしたり、担任と相談し、教室での学習に参加したりすることができている。

具体的な取組

○登校サポーターによる別室登校支援

登校サポーターを活用し、別室に常に教職員がいる状況をつくり、不登校児童がいつ登校しても対応できるようにしている。実際に、不規則に登校しても居場所があることで、児童や保護者は安心して学校に登校することができている。

○担任と登校サポーターの連携

当該児童が登校したときは、登校サポーターが担任に連絡する体制ができている。別室利用の児童が登校したとき、必ず担任と挨拶をする。学級への所属感を絶やさないようにしている。別室では、児童が担任から提供された課題を自習する。登校サポーターはその補助をしている。また、遊ぶ時間を設けるなどを通して、安心して学校にいられるようにしている。

○別室教室の場所について

教室から離れた場所に別室教室を設置しているため、他の児童を気にせずに来室することができ、安心して過ごすことができている。

○保健室との連携

別室支援の担当を養護教諭としていて、登校しぶりが始まった初期の段階から別室支援につなぐことができている。初期段階で別室を活用することができるため、学校とつながりをもち、早期に教室復帰をすることができる。

成果

教室以外の居場所があることで、学校とつながりをもてるようになり、早期の教室復帰にも寄与している。教室に入れない児童も別室を利用することで、不登校を未然に防いでいる。

課題

不登校の児童と、教室に入れない児童が同じ空間にいることができる環境の整備が必要である。

校内別室における不登校生徒の対応について

不登校生徒の状況

対象生徒は、起立性調節障害で朝起きることができない。騒がしい環境が特に苦手で、教室に居づらく、精神的に不安が大きい。集団が苦手で、家庭や教室で安心できる場所が見付けられない等、様々な状況にあり、校内別室で過ごすようになっている。

具体的な取組

○安心できる居場所の提供

不登校対応巡回教員、校内別室指導支援員、別室担当の非常勤教員が週５日間、別室に在室することにより、生徒がどんな時間でも登校できるようにしている。担当者は、それぞれの生徒の取り組みたいこと等を話題にして会話を多くするようにしている。また、ぬいぐるみを置き不安の強い生徒の心の安定を図っている。

○学び直しの支援

校内別室に登校する生徒は、教室で授業を受けていない分、学習面での遅れがある。特に、小学校の内容が未定着な生徒が多いので、ＡＩドリルをやるだけではなく、担当教員がホワイトボードを活用しながら個々に学習をサポートしている。

○トランプ等での交流によるコミュニケーション力の向上

コミュニケーションが苦手な生徒が多いため、トランプやリバーシ、ボッチャ等の他者と関わるゲームを意図的に行っている。初めのうちは教員から提案していたが、生徒同士で声をかけ合い、交流するようになった。

○メリハリのある生活

メリハリのある生活ができるようにするために、基本的な一日の流れを決め、１、３、５時間目を学習の時間、２、４、６時間目をフリーの時間とした。一日の流れを決めたことで、交流ばかりではなく、学習にも集中して取り組むようになった。

成果

以上の取組をしてきた結果、４月当初、校内別室への登校が１日～３日程度であった生徒がほとんどであったが、12 月現在、毎日校内別室に登校する生徒が８名、自分の好きな教科の授業に参加するようになった生徒が４名となった。

課題

４月に開設し、試行錯誤しながら運営してきたため、引き続き利用生徒の状況が改善するようにしていく必要がある。

別室支援について

不登校児童の状況

対象児童は、学校に登校することが難しかったが、担任、特別支援コーディネーター、養護教諭、ＳＣ、保護者等、様々な立場からの粘り強い支援を続け、別室に登校できるようになった。現在は、自分のペースで別室を利用しながら、一日１時間の授業と給食の時間はそれぞれの教室で過ごしている。

具体的な取組

○別室の整備

本校では、不登校児童の居場所や教室復帰へのステップとして、令和４年度から、別室を用意している。場所は校舎１階の奥にある多目的室を使用している。人通りが少なく、人目を気にすることなく出入りできる。

また、教室から離れているため、静かな環境で過ごすことができる。

○活動内容

登校した際、１日の流れを時間割と照らし合わせて不登校担当の養護教諭が確認している。授業に参加できる際は、教室と別室を行き来している。別室では登校サポーターが見守り、自分の課題や担任から提供された教材に取り組んでいる。絵を描いたり、折り紙をしたり、ゆっくりと過ごすこともある。また、別室に登校している他の児童と話をしたり、簡単なゲームをしたりすることもある。

○専門機関との連携

本校では、区のＳＣ、都のＳＣの２人体制で相談が行われている。定期的に面談を実施している児童もいる。個々の状況に応じて、外部の専門機関を紹介し、学校復帰や教室復帰へつないでいる。

○「振り返りシート」の活用

「振り返りシート」を活用し、担任と連絡を取っている。担任は、児童が別室でどのように過ごしたかを把握している。

成果

個に応じた別室運営の中で、居場所ができ、安心して登校できるようになった。教室で１日の半分を過ごせる児童や、学校行事に参加できる児童が増えた。教職員だけでなく、別室登校している児童間で交流が生まれ、楽しく会話する様子が見られた。

課題

学習に遅れがある児童が多く、個々の学習支援が課題である。

家庭と連携して、学習への支援体制を検討していく。

学校で過ごせる時間を増やす取組について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校入学時には、通常どおり登校していたが、１年生後半から、教室になじめないなどの理由により欠席が増え始め、１年生欠席日数 26 日、2 年生 44 日、3 年生 52 日、4 年生 41 日、5 年生 72 日となった。

具体的な取組

○「毎日登校」を目標に設定

生活習慣の乱れや、苦手教科などへの意識を変えることが必要と考え、「まずは毎日登校」を目標に取組を進めた。

○保護者との連携①

月１回、保護者との話合いの機会を設けた。

○校内体制の充実

特別支援校内委員会において、「不登校傾向児童の報告」として、教育相談コーディネーターが学校全体へ周知した。

別室サポーターや教職員へ、言葉かけや、寄り添い、支援の協力を依頼した。

○担任だけに任せない支援体制

管理職、学級担任、教育相談コーディネーター、それぞれの立場から、現状と今後の取組について保護者と情報の共有をした。

成果

別室登校の利用により「毎日登校」の目標を達成することができ、さらに１校時から登校できる日が増えた。定期的な保護者との話合いの機会は、信頼関係を深めることにつながった。教室で過ごせる時間が大幅に増えた。

課題

中学校進学に当たり、「環境の変化」、「学習の遅れ」、「友達関係の変化」への対応が必要であるため、引き続き、別室と教室の併用を実施できるよう、中学校への引継ぎを綿密に行う。

校内別室指導支援員による不登校児童の支援について

不登校児童の状況

〇対象児童は、小学校４年生から不登校である。現在は、週１日登校する状況である。

具体的な取組

〇校内支援委員会と支援員の勤務

参加メンバーは、教育相談コーディネーター、登校サポーター、別室登校支援員、副校長、担任、ＳＣ、ＳＳＷ、保護者である。

別室登校支援員を週３日（月、火、木）配置している。

〇放課後登校やＳＣとの面談

担任と当該児童が教室や特別教室で学習をしたり、一緒に活動したりする。

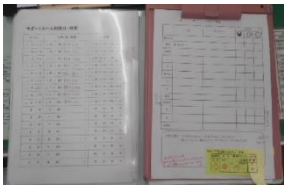
ＳＣと定期的な面談を設け、登校の習慣を身に付けたり、ＳＣと学校でできる活動に取り組んだりする。

〇環境整備と個別支援

教室移動等で児童が通ることが少ない位置に別室を配置した。扉の窓から別室内が見えるようにして教職員が関わりやすいようにしている。

保護者同伴可にして、作成した支援シートを基に当該児童が取り組みやすい活動を選択して過ごしている。

〇情報共有と Wi-Fi 環境



支援ファイルの使用により、定期的な情報交換を行い、管理職、教育相談コーディネーター、支援員、担任が同じ方針で当該児童を支援している。

必要に応じて、タブレット端末は常に使用できるようにしている。

成果

これまで登校できなかった当該児童が、支援員の勤務日（週３日）に登校できる日が増えた。また、展覧会の作品作り、給食を食べるなど支援員と一緒に校内で活動できることが増えた。

課題

支援員の人材を持続的に確保していくことが課題である。

「校内別室における個別支援の取組」について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校から集団生活になじめず、別室登校をしていた。中学入学後、登校サポーターの利用を始めてから現在まで、徐々に週２日の登校が定着し、現在では、２時間ほど学習した後、教室まで給食を取りに行き食べてから、安全面に配慮して、一人で下校することができるようになった。

具体的な取組

○個別対応ができる面談室

面談室が職員室内に２部屋用意されている。教室には入れないが、校内別室であれば登校できる生徒に場所を提供している。

○外部との連携

職員室内の入口付近に面談室があることから、生徒の状況に応じて、学年の教員だけでなく、様々な教員との関わりや生徒間での交流を持ちつつ、教室復帰に向けて徐々に交流を図る場もなっている。また、当該生徒、保護者にＳＣ・ＳＳＷ・外部機関との連携の促しも行っている。

○校内別室における個別支援

登校サポーターと共に、当該生徒のその日の状況に合わせて、タブレットの活用や意欲的に取り組めるプリント等を用意して、学習支援を行う。登校サポーターは午前中までとなっているため、給食は教室まで取りに行く。下校前に担任に会い、一人で下校する。

○校内委員会での情報共有

登校するが、教室に入れない生徒への対応として、校内支援委員会等で共通理解を図り、行事予定・学習プリントの受け渡し、補修等を教職員で連携を図り行っている。ＳＣや外部機関との連携についても、保護者への理解を促しながら進めている。

成果

登校サポーターを導入し、週２日の登校が定着している。また、外部支援機関との連携も良好であり、情緒的な安定が生まれ、学習意欲が向上している。

安心して相談ができる教職員ができ、少しずつ自分に適した環境について伝えることができ、自分の希望する活動についても話すことができるようになった。

課題

学校やＳＣ・ＳＳＷ・外部機関との連携がある保護者は課題解決までの糸口が見え、支援の方法が考えられるため、全ての保護者とつながることが課題である。

校内別室対応を活用し、人とのつながりや個々の状況に合わせた柔軟な不登校対策について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校６年生であり、５年生の時、教室にいることがつらくなり、不登校になった。６年生になって校内別室の開設をきっかけに登校ができるようになり、特定の時間は教室で学習している。

具体的な取組

○校内別室の活用

登校サポーターや教員と、落ち着いた環境の中で、個別の課題やプリント、オンライン授業等に取り組んでいる。テーブルを置き、共有スペースを作り、他の児童との関わりから、小集団での人間関係を築く場にもなっている。

また、栽培活動を行い、心の安定を図っている。

○登校サポーターの活用

登校サポーターによる登校支援で、継続的かつ決まった時間の登校の定着を図っている。

継続的な登校で、生活リズムの乱れの改善にもつながり、日中の活動が確保できている。

○定期的な保護者面談

当該児童の保護者には、１、２か月を目安に、定期的に来校してもらい、家庭の様子や別室での様子などを共有し、その都度支援の目標を確認する場を設けている。

○校内体制の整備・教職員への周知

別室に対する全教職員の共通理解のため、職員室での打合せ等で、週１回程度、当該児童の状況や校内体制等について報告している。

成果

当該児童は、別室利用や登校サポーターの活用により、ほぼ毎日継続して登校ができるようになった。また、校内委員会が運営することで、教職員で組織的に対応することができた。

課題

安心・安全な場の提供だけでなく、自主的に個々の課題に対し、考え向き合うための支援やルールづくりが課題である。

別室指導の取組について

不登校児童の状況

対象児童は、現在小学校４年生で２年生の夏休み明けから登校しぶりが始まり、欠席が続くようになった。保護者、担任、学年の教員、養護教諭が本人に粘り強く関わり、１時間の保健室登校から、別室登校、好きな教科については教室での授業参加と、ステップアップしてきた。現在は、休みが長期化することなく、安定して別室への登校ができている。

具体的な取組

○保護者との連携

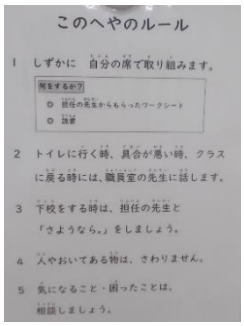
保護者は初め、当該児童が登校できないことに戸惑っている様子だったが、家庭と学校の様子を共有した結果、保護者の困り感も薄れていった。将来のことも前向きに捉え、当該児童のためにフリースクールや別室支援のある中学校など、様々な選択肢を検討している。

○児童の負担になりすぎない課題

別室では担任の用意した課題に取り組んでいる。勉強は苦手であり、学習に遅れもあるが、当該児童の現状に合った難しさ、量を調節している。

○組織としての体制づくり

別室登校支援を始めるに当たり、別室でのルールを、特別支援委員会が中心となり決めた。ルールを別室に掲示することで、全教員が指導しやすくなり、統一して別室支援を行うことができている。



○登校サポーターの活用

登校サポーターと、別室で課題に取り組んでいる。学習に遅れはあるものの、当該児童なりに計算ドリルや漢字が解けるようになると自信がつき「分からないから教えてほしい」と困った時に聞くことができるようになった。

成果

集団に不安を感じ、登校することができなかった当該児童が安心して登校し、学校生活を送れている。

別室支援という選択肢が増えたことによって、校内における不登校児童支援の手だてが広がった。

課題

今後は、利用者が増えることを見込んで、校内組織を編成していく。

複数の校内別室指導支援員による、多様な生徒への対応

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校から不登校であったが、中学校に入り１学期の間はほとんど休まずに登校していた。しかし、１年生夏休み後から休みが続き不登校となった。家庭の協力が得づらい状況であったため、担任が家庭訪問するなどにより働きかけ、１年生の終わり頃から時々給食を食べに登校することができた。

具体的な取組

○校内別室指導支援員を複数配置

教員の他に、大学生や元教員の校内別室支援員を複数配置して、学習の支援や見守りだけではなく、話し相手や遊び相手として寄り添い支援を行っている。当該生徒は相性の良い支援員を見付けることができ、登校のきっかけになった。

○お迎え支援の実施

当該生徒と相性の良い校内別室指導支援員による登校時のお迎え支援を開始すると、お迎え支援実施日だけでなく週２、３日登校するようになった。

○他者との関わり方を学ぶ

カードゲームやボードゲームを設置し、自由に遊ぶことができるようにした。言葉によるコミュニケーションが苦手な生徒も、ゲームを通して、校内別室に通う他の生徒と交流することができるようになった。

○校内別室の設置

玄関横の部室を、ソファや机、観葉植物などを配置し、緊張感なく過ごせる雰囲気の校内別室として整備した。また、校内別室担当教員等と常駐し、寄り添い支援を主として行う校内別室指導支援員との役割分担をして、週５日、一日を通して支援を行うことができるようになった。

成果

複数の校内別室指導支援員がいることで、生徒がそれぞれに自分に合った校内別室指導支援員を見付けて登校するようになった。多い日は 10 人以上の生徒が校内別室を利用し、不登校の未然防止の役割を果たしている。

課題

学習への意欲が低い生徒は校内別室で学習に取り組もうという様子は見られないため、意識付けを今後どのようにしていくかが課題である。

校内別室利用状況について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校の頃から教室での活動に困難さを示していた。中学入学後は校内を利用し、１年次は週２日程度、２年次は毎日午前中の登校、現在は毎日遅刻をせず登校し、午後の授業までいられるようになった。３年生になり積極的に授業への参加や給食の喫食を行い、教室復帰や進路決定に向けて非常に前向きになった。

具体的な取組

○登校日誌の活用

校内別室を利用する際は必ず登校日誌を記入することとしている。登校日誌の内容は、①登校時間②活動内容③教員確認欄である。校内別室で何をしたのか、また何時間目に授業に参加できたのかなど、一日を振り返るようにしている。登校日誌の活用で担任や学年教員とのコミュニケーションも増えた。

○校内別室利用許可届の作成

校内別室を利用する上で、保護者と利用について話をして、年２回程度（前期、後期）短期の目標を考えるようにしている。利用する上であくまでも教室復帰が目標ということを伝え、利用内容が曖昧にならないように気を付けている。

○ＳＣとの連携

週１回ＳＣ面談を実施し、最近の出来事や進路について話をする環境を整えた。毎週ＳＣ面談を実施することで、自分の気持ちの整理や今後の取組への励みとなっている。

○ＩＣＴ機器の活用

自習メインのため、タブレットを使用し、デジタル教材を活用している別室利用生徒も多い。

成果

登校への振り返りや後押しをすることで週２日程度の登校から毎日登校することができるようになった。担任の声かけや参加できる授業の教科担任との連携も図れたことが良い結果につながっている。

課題

自習形態のため、何をしていいのか分からないという生徒や意欲的ではない生徒もいる。オンライン授業の配信等、校内でできる支援を検討していく必要がある。

不登校生徒等への取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校１年生であり、小学生の時に強迫性障害と診断されている。ルーティーンとしている動作が多く、新しい環境への不安から登校できない状態にあった。校内特別支援教育委員会で情報共有を行い、適切な支援についての検討を重ねた。家庭の協力もあり、別室登校ができるようになり、宿泊学習へも参加を予定している。

具体的な取組

○別室を活用した対応

時間割上に別室担当者を決め、１人の教員が常駐している。パーティションで区切るなどして複数の生徒が使用する際に他の生徒が気にならないよう配慮している。

○登校サポーターの活用

登校サポーターの出勤日には、お迎え支援や別室の運営、学習の見守りを行っている。

別室を使用する生徒は、ＡＩドリルやワークなどの個別でできる学習課題にそれぞれのペースで取り組んでいる。

○ＳＣやＳＳＷとの連携

週１回の支援会議（ＳＣ、ＳＳＷ出席）を開き、不登校傾向のある生徒など特別な配慮を要する生徒の情報の共有と今後の支援方針等について検討している。

不登校生徒の状況に応じて担任だけでなく、ＳＳＷが家庭訪問を行ったり、登校サポーターを活用した支援を行ったりしている。

週３回、都と区のＳＣが来校し、相談室にてカウンセリングを行っている。

○特別支援教室との連携

支援の必要な生徒に対して、特別支援教室教員が巡回心理士と連携しながら一緒に授業に参加して支援している。

成果

別室登校を行っている生徒のうち、教室復帰を果たす生徒が多数いる。

課題

ＳＳＷと連携し、当該生徒だけでなく、保護者に対する支援につなげていく。

自分らしい登校スタイルの確立について

不登校生徒の状況

対象生徒は、不安感の強い生徒である。宿泊行事への不安が高まったことをきっかけに不登校となった。教室での学習を行うことはできないが、学習意欲は高いため、別室登校での学習環境を利用することとなった。当初は教室復帰を目指していたが、当該生徒のニーズにより登校日数を増やすことを目標とすることに切り替えた。

具体的な取組

○学習機会の保障

定期考査だけでなく、授業で行っている小テストや到達度テストなど、別室でも実施し、成績に反映している。いつ・どこで行うのかは教員と別室支援員との間での連携を図っている。

○学習環境の保障

別室にはＷｉ－Ｆｉが設置されておらず、タブレットの使用ができなかった。そのため、学校に配置されているルーターを活用して、別室でもタブレットが使えるように環境を整えた。

○ＳＣの活用

ＳＣの勤務日に合わせて、別室の登校を行うことで継続してカウンセリングを受けることができるように整えた。ＳＣは、当該生徒が感じている不安を整理するだけでなく、空いている教室に付き添って教室復帰の練習も行っている。

④友達との関係の継続

当該生徒が安心して接することのできる友だちと、休み時間に相談室で関わり、教室復帰に向けて不安感を減少するようにしている。

成果

当初、登校ができなかった当該生徒だが、ＳＣとの面接や別室登校を経て、現在は週４日別室での登校ができている。進路指導についても別室登校で行い、自信をもって次の進路先を選択することができた。

課題

教室復帰を目指すのか、学校に登校することを目指すのか、生徒に合わせた支援を行うこと。

校内別室を活用した不登校生徒への支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校３年生である。中学校入学当初は教室に入ることができていたが、５月頃から徐々に欠席が増えた。不登校の要因は、集団生活への不安である。中学校１年生の後半から校内別室登校ができるようになった。また、３年生後半からは、進路選択に向けて、教室復帰に向けて一歩踏み出している。

具体的な取組

○安心して登校できる校内別室

校内別室は、生徒用玄関から近い位置に設置していて、登校後すぐに入室することができる。他の生徒との関係を気にしている生徒にとっても、登校しやすい環境を整備している。

○学習スタイルも状況に応じて設定

校内別室では、各自の自主学習を基本としている。その中で、一人１台端末を活用して、他の利用生徒と協働学習をする時間も設定している。

○登校スタイルは生徒個々の状況に応じて設定

校内別室は、月・木・金曜日の午前中に開室している。その中で、各自の生活リズムや体調に合わせて登校日数や登校の曜日、登校時間を選択できるようにしている。生徒個々のスタイルを大切にしている。

○校内支援体制の構築

区の登校サポーターが支援する中で、担任や学年教員などが校内別室を訪れて生徒と話をしたり、配布物を渡したりしている。登校サポーターが作成する「活動報告書」及び利用生徒が記入する「校内別室登校の記録」を生徒ごとにファイリングし、生徒の様子を校内で情報共有して支援体制を構築している。

成果

欠席が続き、教室への登校に不安のある生徒に対し、安心して登校できるきっかけをつくっている。多くの教職員のサポートがあることで、生徒や保護者から信頼を得ることができている。

課題

校内別室から教室復帰への足がかりをつくるために、生徒同士の交流の機会を増やす必要がある。

いつでも、誰でも、誰にでも。一人一人に応じた心理的安全性の高い居場所の提案

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校６年生の９月から不登校となった。中学校入学後２か月は通常登校できたが、５月から集団の雰囲気に不安感をもち、校内別室で過ごす日数が増加している。保護者は理解があり、当該生徒の意思を尊重しつつ、授業や行事への参加を促しているため、校内別室を中心に登校はできている。

具体的な取組

○校内別室の環境改善

・人的環境整備

登校支援員２日間配置（午前）に加え、教員・会計年度職員の巡回により個の状況に合わせた支援を充実

・物的環境整備

パーティションで仕切り、一人一人のスペースを十分に確保

○個に応じた学習機会の充実

・ＡＩドリルの活用

個人で目標と計画を立て、個別最適な学習に取り組み、学習成果を評価

・授業及び補習への参加

興味・関心の高い授業や放課後学習教室など、心理的ハードルの低い場面から参加を奨励

○小集団による活動場面の設定

・憩いのスペース

教室中央に机とソファーを設置、休み時間には級友や支援員と談笑やゲームで過ごす憩いのひととき

・特別支援教室

担当と協働でスキルトレーニングの実施

○特別支援教室・ＳＣとの連携強化

・特別支援教室でのトレーニング

個人の課題を段階的に解決したり、学習活動につなげたりする円滑なコミュニケーションの育成

・ＳＣ等との面接・相談

困り感を相談し、解消する専門家、不在の時は管理職にも相談可

成果

支援開始前は、自分の考えを的確に伝えることが難しくトラブルもあったが、開始後は様々な支援員等と関わることで少しずつコミュニケーションが円滑になり、合唱コンクールに参加したり、主体的に定期考査へ向けて学習したりできるようになった。

課題

通常の授業や放課後における学習機会への参加率を増やすことで、社会性の育成と学力の向上を図っていくことが課題である。

教室に入れない生徒の居場所支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校１年生の後期から欠席が増え、登校しても教室に入ることを拒むようになった。２年生からは教室ではなく別室登校を希望し、不定期ながらも継続して登校している。保護者は当該生徒の意思を尊重しており、別室登校への理解もある。

具体的な取組

○校内別室の設定

３人の支援員を配置し、月曜から金曜の午前中に校内別室を開室している。毎日決まった時間に部屋が開いていることで、生徒は安心して登校することができ、また、見通しをもった生活を送るための一助にもなっている。

○支援員・生徒・教員のネットワーク

３人の支援員は連絡ノートを活用し、支援員同士や教員との情報共有を図っている。

生徒は個人ファイルにその日の活動内容や気持ちを記入することで、支援員や教員と連携を深めている。

○３人の支援員による関わり

複数の支援員が曜日代わりで常駐している。他者との関わりに困難のある生徒が、より気の合う支援員を見付けることによりスモールステップで人間関係づくりを学ぶことも可能となっている。

○教室レイアウトの工夫

パーティションを利用した個別空間、机を合わせた談話空間など、生徒がその日の気持ちに合わせて活動場所や活動内容を選べるようにしている。

成果

当該生徒は、別室が安心して過ごせる場所となっており、自宅で過ごし続けることはなく、登校ができるようになった。他の生徒も同様に、「別室があるなら」と自宅を出られるようになった生徒は一定数おり、集団や教室が苦手な生徒の居場所となっている。

課題

今後別室利用希望者が増加した場合には、部屋が狭く使い方の工夫が必要である。

生徒の生活リズムに沿った支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学生の頃から自分自身の学力について自信がもてず漠然とした不安を抱えて過ごしてきた。努力して学習しても思うような結果が得られず、教室での一斉指導を受け入れられない抵抗感をもつようになった。

具体的な取組

○校内別室の活用

自分のペースで過ごせる居場所をつくり、気兼ねなく過ごせる環境を整えた。

自分の思いを気軽に話せる環境や、生徒相互や生徒と支援関係者の関係づくりに留意した。

○ＳＣによるカウンセリング

小学校から継続して関わっているＳＣが定期的に不安や状況を確認し、助言を行えるようにした。

ＳＣからの情報を共有し、支援の在り方についてＳＣと相談し、支援を進められるようにした。

○個別学習の時間の設定

配架した国語・社会・数学・理科・英語の解説書や問題集を利用して、教科担任からの課題の指示が容易になり、利用する生徒が取り組みやすくなった。

取り組む学習は生徒が自ら考え決められるようにもして、生徒の希望に沿って支援員が個別の学習支援を行った。

○学級との関わりの維持

給食を自分で教室に取りに行くようにした。配膳を待つ間、生徒や担任、副担任との会話から触れ合いが生まれるようにした。

行事への参加を積極的に促すようにした。普段からの担任の働きかけや友達との関係づくりが効果を発揮できるように計画的に進めた。

成果

２年生の４月からＳＣとの面接を経て、７月頃から別室登校を開始することができた。

２年生９、10 月は、週１、２ 日で別室登校した。11 月に行われた舞台発表や職場体験に事前学習も含めて参加できた。３年生から別室と外部機関を合わせて週５日の登校が実現した。

課題

当該生徒は、進学を目標として学習に向かう意欲をもっているため、受験に必要なことを具体的に示し、継続して準備を進められるようにすることで、学ぶことへの意欲が継続するようにする。

不登校生徒の学校復帰を目指す支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校から欠席日数が多く、中学校に入ってからも欠席が続いていた。不登校の要因は、学級の友人と話したりすることが難しく、教室に入ることができないことである。

具体的な取組

○学習の記録について
校内別室登校時に学習内容を記録し、担任とやりとりを行うファイルを活用している。

○校内別室登校について
教室復帰を目指して登校サポーターの見守りの中、自習形式で校内別室登校を行っている。（月曜日～金曜日）
民間団体の協力を得て、教職員や中学生とのコミュニケーションが取れる校内別室登校を行っている。（毎週木曜日）

○支援方法について
毎週開かれる教育相談部会で情報交換を行い、個々の生徒に応じて対応策を考えチームとして取り組んでいる。
・担任から定期的に電話連絡をする。
・保護者、本人との面談を実施する。
・外部の支援機関等の案内を行う。

○ＳＣとの面談について
区ＳＣは、毎週水曜日、金曜日に来校し、都ＳＣは、毎週火曜日に来校する。生徒のみ、生徒と保護者、保護者のみ等、様々な形式で相談可能としている。校内別室登校とＳＣとの相談を併用することもある。

成果

個に応じた校内別室運営が行われ、教室復帰の足がかりとなった。
毎週行われる教育相談部会で話し合い、担任だけでなくチーム学級で取り組み、関係機関とつないだり関係をつくったりすることができた。

課題

校内別室登校をしたり、関係機関やＳＣにつないだり個々の生徒に応じて対応をしているが、教室復帰に至らないこともある。

校内別室指導支援員の活用について

不登校児童の状況

対象児童は現在、小学校４年生で、保育園の頃から登園を渋ることがあり、小学校１年生・２年生の時に登校を拒むようになった。３年生に入ると改善の兆しが見られたが、依然として欠席は続いている。

具体的な取組

○肯定的な声かけ

登校した際は、「良く学校に来たね」、「会えてよかったね」、「何か嫌なことあったの」など、当該児童の気持ちに寄り添う声かけをした。

また、帰宅しようとする際には、嫌なことがあったら根気強く話を聞き、児童の気持ちを落ち着かせるようにした。

○校内別室活用

気持ちを落ち着かせるため、児童の興味・関心に応じた学習内容を行った。学習内容に応じて褒めることで自信をもたせ、気持ちを落ち着かせることができ、教室へ行くまでの時間が短くなった。

〇担任支援

当該児童が落ち着いたところで、担任が教室に入れるように迎えに行くようにした。校内別室での支援を通じて、支援員が促すことで、担任が来なくても自分で教室にまで入れるようになってきた。

〇教室支援

教室に入る時間を決め、守れた場合にはシールを貼るなど、視覚的に自分の頑張りを確認できるようにした。

成果

段階的に表情が明るくなり、教室に入るまでの時間が短縮され、担任の支援を受けなくても自分から教室に入れるようになった。また、通常どおり登校できる日も少しずつ増えてきた。

課題

保護者に連れられることなく、当該児童自身の意思で登校できるようになることが課題である。

校内別室を活用した不登校対応について

不登校児童の状況

対象児童は、学年が上がるにつれて一人で何かに取り組むことへの不安感が強くなり、教室に入ることが難しくなった。学校に来ても、教室に行けないため、ＳＣや養護教諭、学習支援員と過ごすことが多かった。現在は、別室で活動に取り組んでいる。

具体的な取組

○別室支援の充実

登校しぶりの児童や、教室や集団に入るのが難しい児童の居場所として別室を設けている。

児童が登校しやすいように、１階に別室を設置している。別室では、担任から提供された課題や自分ができそうな課題を自ら選択して学習している。

また、週３日、登校支援サポーターが学習の様子を見守っている。

○学習満足度調査の活用

年２回実施し、児童の意欲や集団としての実態を把握している。結果から、今後の対応について共有し、当該児童が安心して生活できる学級づくりに活かしている。

○学校全体で情報共有

毎週金曜日に交流夕会を設け、不登校や登校しぶりのある児童の様子と対応の状況、児童の気になる点などを担任が報告している。全体で情報共有を行うことで課題のある児童に対して、組織的な対応を行っている。

また、年２回の教育相談研修会では、ＳＣや巡回心理士による講話を実施し、知見を広げている。

○ＳＣ、ＳＳＷとの連携

週２回、ＳＣとの面談日があり、児童や保護者が定期的に相談に来ている。担任や養護教諭は、ＳＣと情報共有し、今後の対応について検討している。また、不登校児童や家庭の支援が必要な児童については、ＳＳＷと連携して、連絡を取ったり、家庭訪問をしたりしている。

成果

校内別室が設置されたことで、児童が安心して過ごせる居場所ができた。当該児童は、別室で活動し、時間割によっては教室で授業に参加することができた。他の児童も、別室を利用して継続的に登校できている。

課題

長い時間、別室が利用できる校内体制の整備が必要である。

安心して過ごせる環境づくりについて

不登校児童の状況

対象児童は、小学校３年生の年度末に友人関係のトラブルがきっかけとなり、集団に入ることや教室へ入ることができなくなった。ＷＩＳＣ検査の結果、注意集中に課題があるため、特別支援教室を利用している。現在は、学校内外の資源を活用し、おおむね登校できている。

具体的な取組

○校内別室登校

教室に入ることができない場合に、別室登校支援員が当該児童に寄り添い、話を聴き、解決できるようにアドバイスをしたり、担任・養護・管理職へ報告したりするとともに、学習のサポートを行った。

○児童のニーズや課題に合わせた個別対応

担任は当該児童の人間関係の調整を始め、クラスでの居場所を確保した。また、一日の予定や振り返りを記入する「がんばりカード」を活用する等、ニーズに合わせて温かで丁寧な対応を行った。さらに、保護者へ丁寧な連絡を日常的に行い、保護者と話す時間を確保した。

がんばりカード

月　日（　）　天気：

今日の目標

時間	教科	予定 ◎○△	ふりかえり	
朝の活動				
朝の会				
1時間目				
2時間目				
中休み				
3時間目				
4時間目				
給食				
昼休み そうじ				
5時間目				
6時間目				
帰りの会				

先生から一言

○課題解決への支援

特別支援教室におけるソーシャルスキルトレーニングを始めとしたコミュニケーションの練習を実施し、対当該児童の日常における困り感へのフォローを行った。

○母親の支援

担任を始め、管理職・元担任・特別支援担当教員・ＳＣ・養護等により、気軽に保護者と話す時間を意図的に確保し、保護者の精神的安定を図り、ニーズを把握した。

成果

別室登校支援員の活用により、当該児童のニーズに合わせた丁寧で適切な支援へとつなぐことができた。また、担任を始め、学校全体で児童や保護者への支援・指導を進めたことで教室復帰を果たすことができた。

課題

当該児童の発達特性に対する支援と、保護者の精神的不安定さへのフォローを継続していく。

登校はしているが学級復帰が困難な児童への校内別室指導支援員の対応について

不登校児童の状況

対象児童は、保護者と昇降口まで登校しているが、途中で何度も立ち止まり、登校を拒む。昇降口で支援員が引き取り、保健室、別室支援の教室など児童の気持ちが落ち着く場所に移動している。その後、教室に入れることもあるが、授業に参加せずうずくまって眠ることがある。また、給食を食べないことがある。

具体的な取組

○寄り添い

登校後、校舎に入れないときは、外階段に支援員と並んで座り、始めは様子を静かに見守り、その後、当該児童に穏やかに話しかけた。近付いてきた誕生日、楽しみにしている学芸会、好きな給食の献立、家庭や学校で困っていること等について児童が感じていることを尋ね、共感的に寄り添った。

○安心できる雰囲気づくり

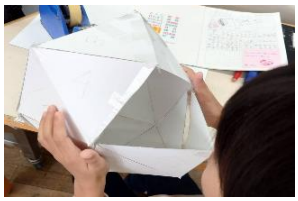
30 分以上校舎に入れない日は、無理に促さず、児童の気分転換を図った。校庭の植物や生き物を見たり触れたりして互いに感じたことを伝え合い、「校庭の様子を見てから教室に荷物を置きに行こう。」など、次に行うことをさりげなく知らせると行動に移すことができた。

○教材の工夫

別室支援では、児童の能力や興味・関心に沿った教材を用意し、達成感や満足感を味わえる活動を毎回 30 分間行った。かけ算の学習では、足し算や引き算を使って答えを出すなど、自分なりに工夫して解き、その良さを具体的に褒めた。児童が自分の良さに気付き、自信になる言葉かけにも配慮した。

○学習方法の工夫

別室支援では、他学年の児童と協力して立体図形を作る活動や風船バレー等の児童同士が体を動かしながら関わる場面を設定した。作成の手順や役割分担、風船のラリーを続けるための作戦など協力の仕方を話し合わせることで、成功体験やそれに伴う達成感や成就感を自分一人だけでなく、他の児童と一緒に味わえるようにした。



成果

当該児童が登校時に教室に入れた日数は、7 月は 0 日、9 月は 4 日、10 月は 8 日と徐々に増えている。学級担任や支援員が当該児童に共感的に関わり、意思を理解し、尊重することで、当該児童が安心できる関わり方や環境が整備されつつある。

課題

当該児童が穏やかな態度で教室に行けるようにするだけではなく、教室で友達と関わりがもてるようにすることが課題である。

教室復帰や関連機関の利用等につなげるための校内別室での取組

不登校生徒の状況

対象生徒は、今年度４月から不登校になった。クラス替えでそれまでの友人関係が変化したことで欠席が続くようになった。保護者面談を通して生徒の悩みなどが分かり、教室復帰を目指し校内別室を利用することにした。６月から開始し休まずに通った。学習や進学への意識が高まり、９月の定期考査後、自分から教室復帰を申し出た。その後も毎日登校を続けている。

具体的な取組

○校内別室での学習

校内別室は教卓１つ、生徒席８つの小教室である。生徒は自分で問題集やタブレット端末などを持参し、学習に取り組んでいる。

○担任・学年との教育相談

校内別室利用生徒には別室での学習と合わせて、担任や学年教員が進路相談等を行った。職員室前のテーブルや進路相談室など面談場所が複数ある。

○ＳＣ面談

校内別室は保健室とＳＣ室の間の位置にある。校内別室利用の生徒の中には、ＳＣ面談等を並行して行う生徒も複数いる。

○校内組織（特別支援委員会）

毎週金曜の特別支援委員会で、校内別室利用の生徒を含めた当該生徒について情報共有と協議を行う。メンバーは、管理職、コーディネーター、各学年の代表教員、ＳＣ、ＳＳＷ、特支教室担当である。

成果

支援員を複数配置し、平日５日間の午前中は全て校内別室を開室できている。利用生徒の都合に合わせて対応できる。

なお、11 月現在、利用生徒 10 人の内、４人が教室復帰できている。

課題

人材を探しても、学校と候補者それぞれのニーズが一致しないことがあるなど支援員の確保が難しい。